

一首目と二首目は「詩歌」一九四〇年（昭和十五）三月号掲載の「漫才」、三首目以降は同年の「短歌研究」十月号の「非理論的な思想」より。

これらが発表される前年の一九三九年には、日独伊三国防共協定を軍事同盟に強化するかどうかをめぐって三国の交渉が繰り返しなされていた。同年の五月には日本とソ連との間で軍事衝突（ノモンハン事件）が起きていた。九月にはドイツがポーランドに侵攻して第二次世界大戦が勃発する。国内では「愛馬進軍歌」がヒットするなど戦時色が強まり、パーマネント禁止や「日の丸弁当」という語の流行に見られるように、質素な生活が奨励されるようになった。翌年、すなわち右の歌が発表された一九四〇年には、「京大俳句」への弾圧（新興俳句弾圧事件）が起きている。

掲出歌の一首目、せっかく大阪に来たのだから、漫才を見たい、その素直な欲求を高々と詠む。「この要求、ちつともをかしくない」は、贅沢が敬遠され、戦争が最優先される世相への反感であろう。しかし、楽しみにしていた漫才を見ると、作者の望むものではなかった。戦時下、漫才は

貯金や節約などの国策を国民に浸透させるために利用され、自由な表現も規制された。二首目はそのような「御用漫才」への皮肉。

三首目、ノモンハン事件の帰還兵の話を書く作者。その詠いぶりは淡々としており、日本の軍事行動に対する作者の冷静な様子を感じさせるが、四首目を見る限り、必ずしもそうとは言い切れないようだ。兵の話聞きながら、作者は自分の中で昂つていくものを感じている。五首目、ヒトラーの写真（映像）を見ている作者に「ぐいぐい」押し寄せて来るものがある。その「ぐいぐい」は「時代の英雄」という言葉をもとつて、より強さを増したことだろう。

四首目の「たかぶりゆく」もの、五首目の「押し来る」もの、とは何であり、それに対する作者の想いがどのようなものなのか、これらの歌だけでは断定できない。戦争への反感か、あるいは、その逆か。いずれにせよ、これ以前に、「万才といへない」と言い、「万才」を無批判に言う人々を「小学一年生位の思考」とした詠みぶりと比べると、曖昧と言わざるを得ない。

日中戦争を遂行する日本で、矢代東村は以上のような歌を詠んでいた。ここで、東

村の戦争詠に対する考え方を、小野弘子『父矢代東村』（短歌新聞社、二〇一二年）をもとに紹介しておきたい。

すでに東村は、「詩歌」一九三七年（昭和十二）十一月号に「思ふ通りに書けないといふことが、僕の神経衰弱の有力な原因の一つとなつてゐる」と書いていた。「聡明な人達は／申しあはせたやうに沈黙し、／実に効果的に／沈黙する」（「詩歌」一九三八年一月号）ということも止むを得ない時代であった。しかし、そうは言いつつも、東村が思うところを全く書かず、ただ沈黙していただけではないことは、これまで見た歌からでも明らかであろう。

言論統制が強まる中にあつても、東村は戦争詠へのこだわりを持っていたようである。たとえば、斎藤茂吉の「あたらしきうづの光はこの時し東亜細亜に差しそめむとす」などの歌に対し、「いつになく拙い歌で、これでは頼まれていやいやながら作つたものとしか思へない」（「詩歌」一九三七年十一月号）と評している。さらに、やはり茂吉の歌集『寒雲』に対しては「どれもこれも戦争といふものを驚歎し、讚美し、敬畏してゐるが如くであつて、そこには時